
ラブカクテルス その37

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その37

【Nコード】

N2630D

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は少し埃っぽいカクテルをご用意しています。いかがでしょう？ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前はキャタピラーな生活でございます。

ごゆっくりどうぞ。

良かった。私はやっと降った雨に、久しぶりの洗濯が出来ると胸を撫で下ろした。

ここは土埃の世界。

昔は道をアスファルトやコンクリートで舗装という整備をして綺麗な街を保ち、平和だったと聞ぐが、今は異常な天候がどこからともなく凄い量の土埃を運んできて、地上の何もかもを土埃が覆い尽くしていたのだった。

お陰で晴れた普段の日は、外の世界がどこもかしこもパフパフ。

少しでも風など吹こうものなら洗濯物までパッフパフ。いや、そんな程度の話だけでは済まされないが。

けれど雨の日はもっと凄い事になる。

土は水を得て泥になる。

ペトペトだ。

直接靴を履いて表を歩こうものなら、靴底は泥がこびり付き身長が伸びるくらいの勢いで積み重なって始末に負えない。

はたまた、ぬかるんでいようものなら底無し沼のようにはまり、しまいには本当に足を取られるくらいでは済まされずに、呑み込まれてそのまま抜け出せずに、行方不明なんてことも年間何件かはあったらしい。

恐ろしい。

しかし、この頃はそういった無謀な事をする人はいなくなり、家中も完全に外部と遮断されて、土や泥は入らなくなった。

それもこれもキャタピラーが一躍かつて出ているおかげでもある。

キャタピラーは始め、ただの作業用機械に使われるための車両だった。

しかし事情が変わり、それまでは車といえば、四本のタイヤで走るカッコイイ乗り物だったが、この世の中ではもう何の役にも立たなくなり、この頃はたまにアンティークな飾りとして街中で見かけるくらいのものに引き下がり、そしてその車に取って変わったのがキャタピラー付きの車だった。

昔でいえば戦車やシヨベルカーといったイメージが強いキャタピラーだが、今はその運転席に大砲や、シヨベルが付いていない、しかも近頃の新車のキャタピラーは、斬新なデザインのものもあり、かなりの進化を遂げている。

鉄の帯がグルグルと回り、どんな所でも走る様はとてまたくましい。振動はある程度あるが、それは仕方ない。何しろ地面自体が凸凹なのだから。

でもコンピュータ制御で運転席と車体の間のエアクッションがある程度の揺れを調整してれるので、その辺はそれほど気にならないのだった。

そしてあなどれないのは内装で、かなりのデラックスな作り。

オプションでシートがマッサージチェアのものまであるくらいで、床はジュタン並のフカフカさ。もちろん冷暖房完備だった。

それに操作性も優れていて二本のレバーを行きたい方に倒すだけのシンプルな設計。しかも車体自体を回さなくても運転席だけが独立して旋回するので、後ろ前も自由に変えることが出来る。

だから車社会の頃と違って、交通事故というものはかなり減り、このところ滅多に聞かなくなった。

そして何より画期的なのはチューブと呼ばれる乗り降りの時の方法だった。

ここ近年、土埃と泥から生活を守るために、家という家全てにチューブイン設備を付けることが義務化された。

これは、キャタピラーと建物をチューブ状のもので連結。そして二重の扉をエアー吹き出し掃除機能により洗浄。これにより、キャタピラーから家や、スーパードといった建物全ての出入り方法にこの設備が使われたため、移動の時はそこからの乗り降り、外部と完全に遮断された生活ができるようになった。

その前までは、身体中を何重もの重ねられたコートや、ゴーグル、それに帽子や長靴などが無いと外には行けずに、例えば目的地や自分の家に着いて中に入るとしても、入り口や玄関の手に必ず備えつけられていた部屋で、念入りにエアーシャワーを浴びて、その後土センサーを浴びせられて大丈夫なら入室できる、という生活だった。しかしそこまでしても、完全に社会を土からは守れず、三日に一回の清掃を欠かしたもので、建物のなかはパフパフになり、どうやっても土からの解放はあり得なかった。

そんなこともあり、人が使う施設全て、公園や湖や川などの遊園施設から、生活に必要な全ての建物をドーム化して、チューブインゲートを導入することで、土埃と泥からの闘いに終止符を打った。

人類は土埃と泥に勝利したのだ。

そして私達は昔の様に、衣服にお洒落をして出掛けられるようになったことで、ファッションという文化が戻ってきた。生活はとても平和になった。

しかし、一つだけ問題があった。それは湿気だった。

湿気はドームの中で暮らしているせいで、外へ出しきれずに溜まったものが、この頃問題になっている。

乾燥しているのも考えものだが、湿気ているのも厄介だった。

カビの発生や、窓枠周りの水滴。それに家電ものへの悪い影響はかなり著しかった。

そのために、雨の日だけドームを開ける決まりができ、洗濯や風呂などの過剰な湿気が出てしまう事に関しては、その時を機会に行うこととなった。

洗濯はその季節によって衣類の溜まり方も違うが、一回に洗う量は相当なものだった。そのため衣類はなるべく消臭と消毒を兼ねたスプレーで普段は済まし、この頃は洗濯機も水で洗うイプから、温風で洗浄するものが増えてきたらしいが

、仕上がりはイマイチだと聞く。

しかしあのパフパフとドロドロのペトペトな世の中に比べれば、今の生活は天国だ。

俺の仕事は修理工。

修理するのはキャタピラーだ。

いつもいつもパフパフとドロドロのペトペトの世界で仕事をする。ひどい世の中だ。

風が吹けば、前はたちまち見えなくなるし、しかも電動工具や、エ

ンジン式の機械はすぐに土埃でやられてしまうために、ほとんどが使い物にならない。

だから仕事の主力は人力だ。

今日も、継ぎ目がない作業服を着込んで表に出る。

顔まですっぽりと覆われたヘルメットはかなり視界が広いが、あつと言う間に真つ白になって、グローブで擦ろうものなら、直ぐに静電気がいたずらをして、余計に土埃を集めてくる。

そんな時はお手上げだ。何をしても無駄。

俺達は一人一人、自分で携帯エアシャワーを持っている。あまりに土埃がひどいとそれに対処するが、まあ、何とかの追いかけているのだ。だからあまり細かい事が気になる人には、この仕事は向いていない事になる。

もうもうと吹いてくる土埃の隙間を狙って仕事をこなす。これが一流の職人つてもんだ。

気質と起用さが、この仕事には必要だった。

一応、こんな誰もしたがない仕事だから、普通に比べればお金はいいが、やりがいがあるかと言えばそうでもない。

何せ仕事の時間よりは土埃を落としている時間の方が時間が係る。しかも外での作業は、土埃を防ぐフィルターに時間制限があるために、作業時間が決まっている。だから作業がいくらもう少しという時でも、一回引き上げなければいけなかったりすると、気持ち的にはすつきりする仕事でもない。

普通の生活をしている人には分からないだろうが、嫌な仕事だ。

しかし俺は、昔から頭がいい方ではないし、人に頭を下げるのもよろしくない性分だから、こんな仕事が合っているのだろうが。

俺はそんな事を考えながらキャタピラーの欠けた部分を修理していた。

するといきなり、吹いていた風が止んだのに気が付き、手を止めた。立ち上がって、その不思議な感覚に周りを見渡した。

すると雨が降ってきた。しかしなんて静かな雨なんだ。

いつもと何かが違っていた。

胸騒ぎが体を襲ってきたが、その理由は分からなかった。

気を取り戻して、作業を続けていると、その手元に白いものがフワツと落ちてきた。

雪…

雪だ。生まれて初めて見る雪は段々とその一つが大きくなって、しまいには、あつと言う間に辺り一面を真っ白にしていた。

作業服を着込んでいるせいで、寒さが全然感じていなかったために気付くのが遅くなったのだった。

俺は興奮した。

そして、昔本で読んだ事のある雪だるまを、周りの同じようにはしやいでいる奴らに声を掛けて、仕事そっちノケで作り始めた。

俺達はそれから雪合戦もした。

なんて雪とは楽しいのか。

思わず俺達は童心に帰ってはしゃぎまわった。

そして皆、思い出にと、沢山の小さい雪だるまを作り、瓶に入れて家に持って帰った。

ある者は玄関に飾り、ある者は子供にあげて、ある者は恋人との口マンチックな演出に使った。

その次の日、街は初めてのクリスマスという催しを行い、大量の雪で色々な飾りが成された。

とても大きく話題になり、盛大に祭りは盛り上がり、そして幕は閉じた。

街の皆は疲れ果てて、終わった後は静けさが辺りを覆い、しかしその影で、溶けだす雪から少量の土が、その水に乗って流れ出して、街中のあちこちに入り込んでいたのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2630d/>

ラブカクテルス その37

2011年1月1日10時19分発行